

日本語助辞Waの機能

—文章論文法の記述—

Description of a Functional Japanese Particle Wa

山内 啓介

YAMAUCHI Keisuke

Abstract

This paper discusses the syntax of Japanese grammar by analyzing natural Japanese sentences. In particular, this essay considers the particle “wa,” which is a feature of Japanese grammar, by examining sentences drawn from newspaper articles. Sentence units, the uniformity of the sentences, sentence structure and the sentences in principle were considered. Regarding the Japanese auxiliary “wa,” it was concluded that it represents the subject of the sentence.

はじめに

文章論文法で日本語助辞Waの機能を記述する。日本語文法を品詞論と構文論に分けると、文章論はその構文論に捉えるものである。伝統文法は文法単位に語、文、文章を置くが、その議論を承けて設定する。したがって、日本語の文法論には語論、文論、文章論があり、それぞれに語論、文論が議論されているので、文章論を行う。なお、学校文法文章論¹とする場合がある。いまそれを文章論文法としてみたのは、文章論が文法にあることを言うためである。

文章論が文法にあるとはどういうことか。文法の議論は近代以降に Grammar の翻訳語としての考え方をいれて、それまでの日本語の現象になかった概念を呼び起こした。それが近代から現代にかけて、さらにまた、文法論に、Grammar の二大分野、Morphology および Syntax をとらえるようになった。そして、国語を伝統文法とするなら、学校文法にあった理論と、いまやその一方で、規範文法となる教育文法として、日本語教育でとらえられている文法がある。

しかし、日本語の現象を古代から現代まで通時論で眺めてみて、文法分析に相当するのは、まずは江戸時代の国学者たちの歌学の文法であった。そこには句法を見ることがある。漢文訓読の作法で語法を分析することもまた、古代から行われてきたようである。というのは、漢文訓読文法が、近代にいたるまで訓読法、訓点による語法であったからである。そこには漢文というべく、文法があったはずであるが、近代に西洋文法とする考え方が日本語の現象に覆う。

そして現代語の文法における Syntax の議論が進められるなか、それは文章論によって解明さ

れるとの立場を持つ。本稿は日本語の文章論を位置づけ、その文法をとらえる国語の助詞「は」の議論を日本語助辞 Wa の立場²からとらえる。形態文法から統語文法へ展開すると言うべく、文章文法へと展開すると考える。そこで文章論の視点による「は」の記述を行おうとする。

記述文法の記述説明は、現代語の事象をとらえて、現実の言語現象の究明を目標に、ある時期における一言語の文法現象を、ありのままに記述しようとする文法という辞書義による。なお、世界大百科事典の記述文法の言及に、「20世紀に入って〈構造言語学〉が興ると、これに基づいて文法研究も趣向を変えた。すなわち〈伝統文法〉が概して前述の〈規範文法〉としての色彩を有したのに対し、当該の言語で行われている文法の現状をありのままに記述する方針をとるようになり(これを〈記述文法〉という)、研究対象もヨーロッパ以外の諸々の言語(アメリカ・インディアン諸言語など)に広げて、〈科学としての文法〉の面を強めた。方法的にも厳密さを高めたが、シンタクスの面では〈伝統文法〉よりかえって後退したうらみもあり、いわばそうした行詰りを打開すべく生まれたのが前述の〈生成文法〉の理論だといえる」³と見える。

文章の単位体

文章の単位体は文が複数、集まったものを文にとらえる。書き手がまとまりを与える文章は、章また段落によって構成される。それを形式段落によるのは、書き手またはその編集にあって、文章と指示するものを読み手が受け止めるからである。文章の形式を paragraph として分析し、文章を節に分けるとすると、chapter について、章、節となる。それより以下、項、目が文のまとまりとしてある、分析される対象になるので、形式段落のもと、文章がそれぞれ単位体である。項、節、章、そしてそれぞれのひとまとまりの文章体がある。

文章という語をメタ語にとらえると、文章とは言葉を発して意味のまとまりをもって語の連続にあらわした文および文連続による意思であるとなる。さらに、文、章ともに、日本語の意味では、表現のあやである。文はことばのあやであり、章は言葉のまとまった区切りによる。それは表現されたもの、ことばのまとまりである。文が意味を表し、語は意味最小の単位である。それでは文章は何を表すか。いろどりをを持った表現による言葉である。そこには思想における論理があり、書き手の意見、主張がある⁴。

また、文と文章について明治期の翻訳文法ではその区別⁵を分明にしなかった。文法の議論ではそのままにしている経緯がある。文法の単位に語、文、文章を設定し国語教育に影響したのは時枝学説⁶である。それは現在もなお、言語過程説による文章の解釈としてとらえられる。

日常語では「文」と「文章」とを混同して用いるが、文法学では、文章は一つ以上の文が連なった言語作品をさし、文は文章を構成する下位単位をさす⁷。

日本語文章の分析には、語、文、文章を用い、文法における文、文を構成する文節また語、句、そして段落また章節を単位に用いる。文章のまとまりを示す書き手による段落は、読み手による意味内容のまとまりを読み取る意味段落として、「文段」の語を用いることがある。文章による文段は文章の統一をみることによって作業単位としてある。

文章統一

日本語文章に主題⁸と主語がある、日本語文法に主語がある。それは文章の単位体に共有するものであって、文という単位体の主語が文章という単位体の主語であることがあり、主題となることがある。つまり文章の主題は文の主語となって現れていることがあり、文はその主語をもって文となる。日本語の文においては、かならずしも主語を備えて表現するとは限らない。日本語の文の単位では、その捉え方をすればそれは句であるにすぎないが、その文の主語が文章の単位に主語として表現されていることがわかる。

ただし、文章は文が複数個、集まってできる単位体であるから、文章の主語をその文単位ごとに認めれば、ふつうには文章の単位には文による主語が複数認められることがある。また文章に主語があれば、それがいくつかの文に関係構成する主語となることがある。いま文章の主語を主題主語とし、文の主語を主格主語とすることができるし、文に主題主語が現れ、文章の主題主語となることがあるし、また、文に主格主語があつてそれがまた文章の主語となることがある。

日本語は文章によって主語を求めることができ、その主語は主題ともなつて文章を統一する働きをする。ここで文の主語と文章の主題と共通する日本語文をみれば、話し手が主語である文章に日本語文法の特徴を見ることができる。話し手が人称主語として表れない文である。それは、とりだせば、「わたしは」となる語である。助辞Waの機能においては話者が自らを「わたしが……。わたしは……」と取り立てることをしないからであつて、その語を繰り返すことがあれば、それをとりだせば、対照対比の機能をもって文章の用法となる。

主語を文章に捉えれば、名乗りによる用法で、「わたしは、山田です」と言えば、「山田です」に対しての表現であり、「名前を山田と申します。山田です。わたしが、山田です」となる自分をとりだすことになる。自己紹介だからである。しかし、文表現で多くの場合に、「わたし」を言い出すことはない。表現法でいえば、その取り立てについて、「わたしの名前は」ということがあるのは、「名前を山田と申します。わたしの名前は、山田です」となるのをとりだしている。

日本語文章の単位に主語があるということは、日本語文法の文の単位に主語があるということである。主語をもって文章を統一することは、文の要素を規定し、文の成分としての主語を析出するわけであるから、文法において、それは自明のことである。文章論の分析に、まず主語が核にされる議論である。文章に主語があることを、次に解析しようとする。

文章解析

日本語文章論は文章の単位に文法分析を行う。その単位にある文は文節により構成される。文における文節は、文章における最小の単位ともなる。それは、文節が語であるところを見ると、学校文法の議論を受け継ぐ。しかし一方で、国語教育の学校文法において自立語と付属語という類別で、語に等しくそれぞれの単位を認めてきたのであるが、それは日本語文法の語の認定

に議論を難しくした。

その文節を構成する語とは、ひとつの語をさして、いわば、自立詞と付属辞によって構成されるものであると考えるとよい。語そのものをまた詞とすることが、品詞論における議論の整理になる。文節はしたがって、自立詞と付属辞をもって詞となりうる。その詞を語の単位で見ることは、語の意味内容による。

文章を実験して解析すると次のようである。

まず表現の塊としてある。語の線状になる展開がある。読み手はすでに、句読を付け段落分けを施した文章を読み取るのであるが、日本語表記によって、次の()、末尾に付した通し番号にみられる表現の塊のように、言葉が連なっているのを順に見ていくことにする。

かつての砂町現在の東京江東区の南砂などにその名が残る砂村新田を江戸時代初めに開発したのは江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ内川新田神奈川県横須賀市や吉田新田横浜市の開発にも携わったがこれまでまとまった研究はあまりなかった横須賀市に住む私は定年後新左衛門に興味を持った最寄りの久里浜駅周辺を開拓したのが新左衛門で身近な存在に思えた岡山県出身で生まれ育ったのもかつては海岸で後に干拓された土地だった (1) 言葉は音節で示され仮名書きにすると本来のもの、

かつてのすなまぢげんざいのとうきょうこうとうくのみなみすなどにそのながのこるすなむらしんでんをえどじだいはじめにかいはつしたのがえどのめいでべろっばーすなむらしんざえもんだ

となる。これを表現において、さらに音読みするようなカタカナ表記か、音素レベルでの発音をもってローマ字表記をすれば、形態文法の分析または談話分野からなる分析になる。普通には、日本語文章の表記として、上記引用の意味をもって表れる漢字仮名交じりを用いて、文章の分析対象とする。

同様に続く文章のいわば漢字仮名表記を経て、表現塊は語の単位に分けられる。文章における最小単位となる文節があらわれる。日本語の語意識があるので、その発音に従う。ここでは、(1) から連続して (2) には、文節相互の、つまり語における意味の連鎖があらわれるのを見ようとする。その展開に助辞の-wa が機能しているのは、「新左衛門」「成果」「昨年」である。とくに、文章のテーマに係わるようである。文節をスペースに分けて示す。

新左衛門は 他の 開拓者と 違って 出資するだけでなく 自ら 技術者として 関わっている 私も 自動車メーカーの 技術者だったので 今で いう 土木技術に たけた 点にも ひかれたのだろう

関西方面にも 出かけて 現在の 大阪市福島区でも 新田を 開拓している そうした 足跡を たどり 資料も 可能な 限り 入手 その 成果は 2008 年 自費出版した 砂村新左衛門に まとめた 昨年には 新左衛門を 主人公にした 物語 日本を 拓(ひら)いた 男たちを 電子書籍として 出版した (2) こうして文章は文節に分けられることを経て、文節と連文節となるものの単位に分けられる。

この文章に「私も」と見え、この語が主語となった文は書き手による主語であることがわかる。これは、表現主体の主語と言うべきもので、(1)に見えた「私は」と同様に、その主語が「まとめた」「出版した」に関係構成する。(2)から連続して(3)になるのを、さらに文節と文節とからなる連文節を析出すると、次のようである。

新左衛門は 1601年 現在の福井県鯖江市で生まれている 九頭竜川下流に位置する 水運の要所 三国 (現在の坂井市三国町) に出て 土木工事を請け負う なかで 新地開拓に必要な土木技術を磨いた—ようだ 福井藩士による 史書 「片叢記(へんろうき)」 には 藩主 松平忠昌が新左衛門に資金提供したと—とれる 記述がある 江戸で大仕事を手掛けるのは 「振袖(ふりそで)火事」とも呼ばれた 明暦の大火(1657年)の後だ 時の老中は 「知恵伊豆」こと 松平信綱で 大火を受け 江戸の再開発着手 新左衛門 は 名刹の移築を担当した 後 後の村新田の開拓の権利を得る (3)

ここで、「新左衛門は」(2)に続いて「新左衛門は」(3)とあり、さらに、(3)のはじめにおいては、「生まれている」「出て」「請け負う」「磨いた」と関係構成して、その述語に対する主語である。「江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ」(1)から文章に連鎖する。

新左衛門は 他の開拓者と 違って 出資するだけでなく 自ら 技術者として 関わっている

新左衛門は 1601年 現在の福井県鯖江市で生まれている 九頭竜川下流に位置する 水運の要所 三国 (現在の坂井市三国町) に出て 土木工事を請け負う なかで 新地開拓に必要な土木技術を磨いた ようだ

新左衛門は 名刹の移築を担当した後 後の砂村新田の開拓の権利を得る

この文章における主題は、主語としての「新左衛門」についての「研究」であり、それについて筆者が新たにまとめた「成果」として、「昨年」に出版をした、その内容を述べている。この文章では、その内容には、「砂村新田の開拓」を取り上げている。つぎの(4)に、(2)と(3)それぞれから、主題をもってとりだしていく。以下、(9)まで、段落を見て文段にしてみた。

砂村新田の開拓には ←—— 大名や旗本が 出資している

余剰資金を持っていた大名や旗本も 出資している 幕府が直接開拓する—わけではなく 「民活」の手法が採られた わけだ

「堀江家文書」(首都大学東京図書館所蔵)の中の「砂村新田内割絵図」という資料には 区分ごとの所有者が記されている 財産分けを主たる目的に作成された—ようだが 新左衛門の資金源や交友関係もわかるので 詳細に分析 パソコンを使って復元した ←—— (私が) 分析 復元した

文家の場合 絵図の表記は ←—— (私が) 人物を特定した

家名と官位だけだったので 他の資料にも当たって 人物を特定した

「松平越前守」は ←—— 忠昌の孫 福井藩主の綱昌

忠昌の孫で 福井藩主の綱昌 支援へのお礼の意味で献上された—のだろう
旗本では

奉行経験者の名が多く見られた

旗本は ←—— 幕府が 投資を勧めた

幕府が財産形成のため 投資を勧めた—と思われる (4)

吉田勘兵衛が開墾した吉田新田では ←—— 新左衛門が 資金の一部 提供した

設計と工事監修を新左衛門が担当 資金の一部も 名目上 提供した形になっている
実際には ←—— 勘兵衛が 立て替え

勘兵衛が資金を立て替え、工事が成功したら土地の一部を得られるが
それまでは ←—— 契約で システムだった —ようだ

わずかな報酬しか得られないという契約で 現在のストックオプションに似たシステム
だった—ようだ (5)

内川新田については 完成は 1667年というのが 地元では 定説となっていた

現在は ←—— 石碑に刻まれた年に基づいて のことだ

移築された夫婦橋のもとに立つ石碑に刻まれた年に基づいてのことだ

だが 私は その8年前には 内川新田は いったん完成し その翌年には 最初の検
地を受けた—と考えている

年代が明示されている—わけではないが 江戸末期に編まれた「新編相模国風土記稿」や
明治時代初めの公文書に残る記述を読むと

万治年間(1658~1661年)には 内川新田は いったん完成した—と考えるのが妥当だ
1667年の石碑は 安全祈念のために建てられた—のだろう (6)

新左衛門が生前に残した文書は ←—— 唯一残る 遺訓だ

ほとんど残っておらず 唯一残るのが いわゆる「遺訓」(神奈川県立公文書館所蔵)だ
2008年に出した本で遺訓全文を原文のまま活字化 この中で新田開発に情熱を注いだ
者らしく「田畑が無ければ何事も成らない」と述べている (7)

ベンチャー精神にあふれた新左衛門の功績を後世に伝えるため 講演なども引き受けてい
る 地元 横須賀を中心に 小中学生向けの出前授業もしており これまでに 600人
超す児童 生徒に話をした (8)

新左衛門の墓がある正業寺(横須賀市)では ←—— 「砂村新左衛門祭」が催される

毎年 12月15日の命日近くの週末に 「砂村新左衛門祭」が催される

三百五十回忌に当たる今年に

新左衛門祭が盛大に執り行われる—ことを願っている。 (9)

さて、このように文章は語と文節の連続としてあり、ここで、文章の形式段落を、元記事の資料⁹により示すと、次のようである。句読点、区切り符号を用い、また、文段に見出しがあるので、そのまま頭出しにする。以下では検索の便宜に、文には通し番号をつける。また形式

段落は14段落、文番号の〔①－②〕、〔③－⑤〕、「自ら技術者として参加」〔⑥－⑦〕、〔⑧－⑪〕、〔⑫－⑭〕、〔⑮－⑰〕、「民活の手法を採用」〔⑱－⑲〕、〔⑳－㉓〕、〔㉔－㉗〕、〔㉘－㉚〕、〔㉛－㉝〕、〔㉞－㉟〕、「小中学校に出前授業」〔㊱－㊲〕である。

次に挙げるのは、文段である。形式と意味による段落は、書き手の文章構成と読み手の読解の作業にある。ふれてきたように、文段は読み手によってとらえる解釈となる。その文段を文単位で示すことにする。形式段落の通し番号を用いて、その番号順は、順不同になる。したがって、文段における意味連鎖をとらえて、文章の情報をまとめる。読みやすくするために、わたしに下線を付して見出しをつけた。

新左衛門と私のかかわり

①かつての「砂町」、現在の東京・江東区の南砂などにその名が残る「砂村新田」を江戸時代初めに開発したのが、江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ。②「内川新田」(神奈川県横須賀市)や「吉田新田」(横浜市)の開発にも携わったが、これまでまとまった研究はあまりなかった。③横須賀市に住む私は定年後、新左衛門に興味を持った。④最寄りの久里浜駅周辺を開拓したのが新左衛門で、身近な存在に思えた。⑤岡山県出身で生まれ育ったのも、かつては海岸で後に干拓された土地だった。

新左衛門、その人

⑫新左衛門は1601年、現在の福井県鯖江市で生まれている。⑬九頭竜川下流に位置する水運の要所、三国(現在の坂井市三国町)に出て、土木工事を請け負うなかで、新地開拓に必要な土木技術を磨いたようだ。⑭新左衛門は他の開拓者と違って出資するだけでなく自ら技術者として関わっている。⑮私も自動車メーカーの技術者だったので、今でいう土木技術にたけた点にもひかれたのだろう。⑯関西方面にも出かけて、現在の大阪市福島区でも新田を開拓している。⑰そうした足跡をたどり、資料も可能な限り入手。⑱新左衛門は名刹の移築を担当した後、後の砂村新田の開拓の権利を得る。⑲砂村新田の開拓には余剰資金を持っていた大名や旗本も出資している。

研究成果

⑩その成果は2008年、自費出版した「砂村新左衛門」にまとめた。⑪昨年には新左衛門を主人公にした物語「日本を拓(ひら)いた男たち」を電子書籍として出版した。

新左衛門の遺訓

⑫新左衛門が生前に残した文書はほとんど残っておらず、唯一残るのが、いわゆる「遺訓」(神奈川県立公文書館所蔵)だ。⑬2008年に出した本で遺訓全文を原文のまま活字化。⑭この中で新田開発に情熱を注いだ者らしく「田畑が無ければ何事も成らない」と述べている。

史書に書かれていること

⑭福井藩士による史書「片叢記（へんろうき）」には、藩主・松平忠昌が新左衛門に資金提供したととれる記述がある。⑮幕府が直接開拓するわけではなく「民活」の手法が採られたわけだ。⑯江戸で大仕事を手掛けるのは「振袖（ふりそで）火事」とも呼ばれた明暦の大火（1657年）の後だ。

⑰時の老中は「知恵伊豆」こと松平信綱で、大火を受け、江戸の再開発に着手。

文書の絵図、資料で分かること

⑱「堀江家文書」（首都大学東京図書館所蔵）の中の「砂村新田内割絵図」という資料には、区分ごとの所有者が記されている。

⑲財産分けを主たる目的に作成されたようだが、新左衛門の資金源や交友関係もわかるので、詳細に分析。⑳パソコンを使って復元した。

㉑武家の場合、絵図の表記は家名と官位だけだったので、他の資料にも当たって人物を特定した。㉒「松平越前守」は忠昌の孫で福井藩主の綱昌。㉓支援へのお礼の意味で献上されたのだろう。㉔旗本では奉行経験者の名が多く見られた。㉕旗本は幕府が財産形成のため投資を勧めたと思われる。㉖吉田勘兵衛が開墾した吉田新田では設計と工事監修を新左衛門が担当。

㉗資金の一部も名目上、提供した形になっている。㉘実際には勘兵衛が資金を立て替え、工事が成功したら土地の一部を得られるが、それまではわずかな報酬しか得られないという契約で、現在のストックオプションに似たシステムだったようだ。

横須賀市にある内川新田

㉙内川新田については、完成は1667年というのが地元では定説となっていた。㉚現在は移築された夫婦橋のたもとに立つ石碑に刻まれた年に基づいてのことだ。㉛だが、私はその8年前には内川新田はいったん完成し、その翌年には最初の検地を受けたと考えている。㉜年代が明示されているわけではないが、江戸末期に編まれた「新編相模国風土記稿」や、明治時代初めの公文書に残る記述を読むと、万治年間（1658～1661年）には内川新田はいったん完成したと考えるのが妥当だ。㉝1667年の石碑は安全祈念のために建てられたのだろう。

新左衛門と現在、私とのかかわり

㉞ベンチャー精神にあふれた新左衛門の功績を後世に伝えるため、講演なども引き受けている。㉟地元・横須賀を中心に小中学生向けの出前授業もしており、これまでに600人を超す児童・生徒に話をした。

㊱新左衛門の墓がある正業寺（横須賀市）では毎年、12月15日の命日近くの週末に「砂村新左衛門祭」が催される。㊲三百五十回忌に当たる今年は新左衛門祭が盛大に執り行われることを願っている。

助辞 Wa の機能

文章に見える助辞 Wa について、段落に従い、語である文節または連文節を順にとりだすと、

文番号のもと、次のようである。すでに見てきたように、文章の主題は、助辞 Wa により、とりたてられた「新左衛門」である。第 6 文、第 12 文、第 17 文で繰り返し、とりだされている。それは、第 1 文で「『砂村新田』を江戸時代初めに開発した」ことに言及して、「江戸の名デベロッパ―」である人物、「砂村新左衛門」であるが、その新左衛門についての研究成果であることを前に述べた。

②これまでまとまった研究は ③横須賀市に住む私は ⑤かつては ⑥新左衛門は ⑩その成果は ⑪昨年には ⑫新左衛門は ⑭福井藩士による史書「片聾記（へんろうき）」には ⑮江戸で大仕事を手掛けるのは ⑯時の老中は ⑰新左衛門は

助辞 Wa のつく語による文章上の機能は、上記に続いて、第 14 文「史書『片聾記（へんろうき）』」に記述があることからまた、第 15 文、第 16 文に意味の連鎖を持つことがわかる。これは人物、史書、できごとというふうに、とりだす語の文章に意味連鎖を持ち、文章内容に統一する機能とみることができる。

そして、さらに語になる文節と連文節は、次のようである。

⑱砂村新田の開拓には ⑲幕府が直接開拓するわけではなく ⑳「堀江家文書」（首都大学東京図書館所蔵）の中の「砂村新田内割絵図」という資料には ㉑絵図の表記は ㉒「松平越前守」は ㉓旗本では ㉔旗本は ㉕吉田勘兵衛が開墾した吉田新田では ㉖実際には ㉗それまでは ㉘内川新田については ㉙完成は ㉚地元では ㉛現在は ㉜私は ㉝その 8 年前には ㉞内川新田は ㉟その翌年には ㊱年代が明示されているわけでは ㊲万治年間（1658～1661 年）には ㊳内川新田は ㊴1667 年の石碑は ㊵新左衛門が生前に残した文書は ㊶新左衛門の墓がある正業寺（横須賀市）では ㊷三百五十回忌に当たる今年は

このうちから語をとりだすと、意味の連鎖を作る語群は、次のようである。

研究 私 新左衛門 かつて その成果 開拓 史書「片聾記」 時の老中 わけ 資料 絵図の表記 松平越前守 旗本 吉田新田 実際 内川新田 完成 地元 現在 8 年前 翌年 万治年間 石碑 文書 正業寺 今年

以上によって、この語にあらわされた文が持つ意味情報に文章の統一があることがわかる。この語群は文章の主題となるキーワードである。助辞 Wa が文章に機能しているのである。さきに示した人について、その研究と成果、その内容がここに具体的な記述となる。時間と空間をとらえて事例を挙げている。⇒記号で示すように、下線を付した語がとりだされて情報を確かにする。上述した例に、それは次のようであった。

「砂村新田」を江戸時代初めに開発した ⇒ 新左衛門は名刹の移築を担当した後、後の 砂村新田の開拓の権利を得る ⇒ 砂村新田の開拓-ni-wa （下線は筆者、以下同じ）

また、現在時間については、次のようである。

その成果-wa 2008 年 自費出版した 「砂村新左衛門」に まとめた。

昨年-ni-wa 新左衛門を 主人公にした 物語 「日本を拓いた男たち」を電子書籍とし

て出版した

あるいは、文章の中で資料、史書を取りだして、時空に位置を特定する例である。

「堀江家文書」の中の「砂村新田内割絵図」という資料-ni-wa 記述がある
福井藩士による史書「片叢記」-ni-wa 所有者が記されている

文章構造

日本語文章は文法単位の文が複数、連鎖したものである。2文を超えて結びつき、さらに段落と段落が結びつく。その連鎖は意味による。文章に書き手の意図する内容があり、それを文法により連結する。そこには連文の考え方、とらえ方がある。日本語助辞 Wa の機能によって、文による連文は一つの文章単位となることを見てきた。連文をもって意味内容とすると、文段をどう構成するか、その議論によって文連鎖の捉え方が変わる。

その構造を文法的にとらえるのは文論の範囲から超えることがある。文章構造を図式化すると次のようである。記事の編集によると思われる見出し語の項目について、意味のまとまりを段落とすると、その項目による文段は (I) ~ (IV) に分けられる。

冒頭の文には、「江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ」と書き起こしている

かつての「砂町」、現在の東京・江東区の南砂などにその名が残る「砂村新田」を江戸時代初めに開発したのが、江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ。

末尾の文には、「新左衛門祭が盛大に執り行われること」を書き手の願いで結んでいる。

三百五十回忌に当たる今年には新左衛門祭が盛大に執り行われることを願っている。

そのうちに、次のように、文章構造が捉えられる。文番号と文段を数字でもって示す。

タイトル：開拓魂 江戸の発展支える 新田開発で活躍 砂村新左衛門の功績、後世に伝える

[①新左衛門⇒ ②これまでまとまった 研究-wa

③横須賀市に住む 私-wa ④新左衛門⇒ (I)]

⇒ [⑥新左衛門-wa

⑩その 成果-wa ⑪昨年-ni-wa

⑫新左衛門-wa ⑭史書「片叢記」-ni-wa

⑮江戸で大仕事を手掛ける-no-wa ⑯時の老中-wa ⑰新左衛門-wa (II)]

⇔ [⑱砂村新田の 開拓-ni-wa

⑲「堀江家文書」の中の「砂村新田内割絵図」という 資料-ni-wa

⑲絵図の表記-wa ⑳「松平越前守」-wa ㉑旗本-de wa ㉒旗本-wa

㉓吉田新田-de-wa ㉔実際-ni-wa

㉕内川新田について-wa 完成-wa 地元-de-wa ㉖現在-wa ㉗私-wa その8年前
-ni-wa 内川新田-wa その翌年-ni-wa

㉘万治年間(1658~1661年)-ni-wa 内川新田-wa ㉙1667年の石碑-wa

㉚新左衛門が生前に残した文書-wa (III)]

= [㊤新左衛門の墓がある正業寺-de wa ㊦今年-wa (IV)]

これは、記述をしている文章に現れた文節の語を、次の文に引詞また引句とする用法¹⁰である。エッセイの筆者は、その調査における経験、得た知見、知識にあるものを、その記憶、記録から取り出している。

文章原理

文章は文の集まりであり、文のまとまりである。日本語文章では、文の集まりに、いわゆる完全文となるセンテンスばかりが、必ずしもみられない。第9文、「そうした足跡をたどり、資料も可能な限り入手」、あるいは第16文「時の老中は『知恵伊豆』こと松平信綱で、大火を受け、江戸の再開発に着手」、さらには第21文「財産分けを主たる目的に作成されたようだが、新左衛門の資金源や交友関係もわかるので、詳細に分析」など、体言止めを用いる。

そこで、日本語文章論は日本語の文および文章の文法論議を行うのであるが、文法は広くその範囲をとって文の法則と作文法を内容とする。文章の芸術であること、創作による文章作品の批判、評論をおこなうもの、またその文体を議論するものは、その専門領域を個別に確立する。日本語の文章論文法は、文章文法として形態文法ともかかわあいを持つ。句論、語論と連続する議論である。

日本語文章は現代語文章をその分析対象とするが、日本語文章の歴史は、日本語を近代と古代の研究に画期を見て分類すれば、古代語の文章と対比して、現代語文章、近代語文章と設定することができる。それはまた、漢文訓読による日本語文章と和歌による文章のいわば大和語文章とに分けて、それを止揚することで成立した近代語文章と、それに連続しながらも対比することのできる現代の日本語文章と分けることになる。

文章の要素には文の成分にある主語と述語を必須とする。文に主語があらわされていなくても、それを不完全文としても、その主語を文章によって、読み手、聞き手は知り得ることになる。文章に主題があり、その意味内容では、文に主語があらわされないということがあれば、それは表現者が主語となり得る文章であり、主題が要素として示されている。述語の文にはその関係構成をする語があるので、そこに文の要素として主語が想定でき、それを文章から得ていることがわかる。

日本語文章の要素には文の主語述語をとらえ、単文、複文を分析し、重文とすべきものをとらえようとするが、それには文と句とが係わることを議論しなければならない。それは、通常に行われる主語という成分が文の成立に係わっているということである。主語述語が要素である文また文章を見る、その文法としての文章論をおこなう。まずは、日本語助辞の Wa によって引き出される語として主題があり、また文にある主語の成分要素が文章にあるとすることが日本語文章論の議論である。

おわりに

文章論文法の記述を、エッセイを資料に行った。当該資料は分析対象としてすでにいくつかを取り上げてきたものであるが、新聞記事の文化欄エッセイとして著作者、テーマ、字数など、平均して優れた、読みやすい分量であるので、文章解析の例とした¹¹。そしてここに、文章の単位体、文章統一、文章解析、助辞 Wa の機能、文章構造、文章原理について述べてきた。

文章論は文法論において形態文法に対する統語文法の、日本語文章文法である。その単位は文を複数あわせもち、文章統一されたものである。その統一には意味まとまりをもって、文に思想があらわされ、文章にその意見主張を表す論理と意味内容をもつものであるとする。論文の文章には論議をもって、また芸術の文章には評論をもってその分析がまた求められることになる。

文章解析によって、日本語助辞にある、-wa の機能に着目し、その語に主題のあること、文の主語が文章にあることをもって、文章構造をとらえることを述べた。

注

- 1) 永野賢 (1958) 『学校文法・文章論』朝倉書店。
- 2) 拙稿「日本語助辞『は』の機能」『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第1号、2009年3月。なお、本稿は「日本語助辞 Wa ―現代語文法機能の記述―」『愛知淑徳大学論集―交流文化学部篇―』第5号、2015年3月に次ぐ。文章単位での助辞「は」について、統語としての検証を目途とする。
- 3) 大辞林 第三版の解説、記述文法の項による。なお、ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説に、「記述文法 きじゅつぶんぼう descriptive grammar 一言語のある一時期における状態を記述するもの。文法といっても、狭義の文法論のみならず、音韻論も含めたものであるのが通例で、史的言語学に対する記述言語学と同意に使われるのが普通。ただし、記述言語学が一般的な学問分野・方法をさすのに対し、特定言語の具体的な記述ないしそのように記述された文典をさす傾向がある」と見える。(コトバンク 記述文法とは)

<https://kotobank.jp/word/記述文法-50461> Cited:20160111

- 4) 日本国語大辞典は、「一つの主題でまとまった思想を表現するために、文を連ねたもの」と解説し、文をセンテンスともする。それは、「話しことばの談話に対して書状など書きことばについていい、また、詩歌に対して音数、韻などの比較的自由なものだけをさすことがある」として、古代の用法から、次の例を挙げている。*文華秀麗集〔818〕序「自厥以来、文章間出、未逾四祀、卷盈百余」*史記 - 儒林伝「明^二天人分際^一、通^二古今之義^一、文章爾雅、訓辞深厚」また、威儀や文辞などとして、内にある徳の外面に現われたものの例には、*平家物語〔13C 前〕三・医師問答「凡はこのおとど文章うるはしうして、心に忠を存じ」*論語 - 公治長「夫子之文章、可^二得而聞^一也」をあげる。さらに、「文」は青と赤のあや、「章」は赤と白のあや、あや模様、模様と説明する。*礼記 - 哀公問「有^二成事^一、然後治^二其雕鏤文章黼黻^一以嗣」

<http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=200203bea392H5c45DuS> Cited:20160111

- 5) 注2、項目4、「ぶん(文)(8)に同じ」による。以下、文の説明である。「(8)文法上の言語単位の一つ。文章・談話の要素。単語または文節の一個または連続で、叙述・判断・疑問・詠歎・命令など話し手の立場からの思想の一つの完結をなすもの。定義には諸説ある。西洋文法では、主語・述語を具えることが文成立の条件とされることがあるが、日本文法では必ずしもそれによりがたい。文章。センテンス。」

ここで注意するのは、次の用例である。*広日本文典〔1897〕〈大槻文彦〕四九二「言語を書に筆して、其思想の完結したるを、『文』又は、『文章』といひ、未だ完結せざるを『句』といふ」*草野氏日本文法〔1901〕〈草野清民〕文法篇・二「文又は文章と称するものは、必ず二個以上の詞の集合したる者にて、意義完全なる説話の軀を具へ、且、其示す所の意に従って語調の円満に完結せる者をいふ」

- 6) 文法書に、時枝成記(1950旧版)『日本文法口語篇』岩波全書114 岩波書店、また、主たる学説は、『国語学原論』をはじめ、時枝の著作に見える。
7) 日本大百科全書(ニッポニカ)、「文」の項目による。執筆、清水康行氏。

<http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000204261> Cited:20160111

- 8) 文章において、主題はテーマである。文には文章の主題となる話題が提示される。話題は、トピックである。
9) タイトルは、「開拓魂 江戸の発展支える」、副題に「新田開発で活躍 砂村新左衛門の功績、後世に伝える」とある。筆者は、溝手正儀氏である。日本経済新聞文化欄、2016年1月11日付による。元記事は、次のようである。なお、記事には、段落見出しががついているので〔 〕で示している。

かつての「砂町」、現在の東京・江東区の南砂などにその名が残る「砂村新田」を江戸時代初めに開発したのが、江戸の名デベロッパー・砂村新左衛門だ。「内川新田」(神奈川県横須賀市)や「吉田新田」(横浜市)の開発にも携わったが、これまでまとまった研究はあまりなかった。

「堀江家文書」を基に筆者が作成した「砂村新田内割絵図」の復元図

(図及び写真、略 一筆者注一)

横須賀市に住む私は定年後、新左衛門に興味を持った。最寄りの久里浜駅周辺を開拓したのが新左衛門で、身近な存在に思えた。岡山県出身で生まれ育ったのも、かつては海岸で後に干拓された土地だった。

〔自ら技術者として参加〕

新左衛門は他の開拓者と違って出資するだけでなく自ら技術者として関わっている。私も自動車メーカーの技術者だったので、いまでいう土木技術にたけた点にもひかれたのだろう。

関西方面にも出かけて、現在の大阪市福島区でも新田を開拓している。そうした

足跡をたどり、資料も可能な限り入手。その成果は2008年、自費出版した「砂村新左衛門」にまとめた。昨年には新左衛門を主人公にした物語「日本を拓（ひら）いた男たち」を電子書籍として出版した。

新左衛門は1601年、現在の福井県鯖江市で生まれている。九頭竜川下流に位置する水運の要所、三国（現在の坂井市三国町）に出て、土木工事を請け負うなかで、新地開拓に必要な土木技術を磨いたようだ。福井藩士による史書「片豊記（へんろうき）」には、藩主・松平忠昌が新左衛門に資金提供したととれる記述がある。

江戸で大仕事を手掛けるのは「振袖（ふりそで）火事」とも呼ばれた明暦の大火（1657年）の後だ。時の老中は「知恵伊豆」こと松平信綱で、大火を受け、江戸の再開発に着手。新左衛門は名刹の移築を担当した後、後の砂村新田の開拓の権利を得る。

[民活の手法を採用]

砂村新田の開拓には余剰資金を持っていた大名や旗本も出資している。幕府が直接開拓するわけではなく「民活」の手法が採られたわけだ。

「堀江家文書」（首都大学東京図書館所蔵）の中の「砂村新田内割絵図」という資料には、区分ごとの所有者が記されている。財産分けを主たる目的に作成されたようだが、新左衛門の資金源や交友関係もわかるので、詳細に分析。パソコンを使って復元した。

武家の場合、絵図の表記は家名と官位だけだったので、他の資料にも当たって人物を特定した。「松平越前守」は忠昌の孫で福井藩主の綱昌。支援へのお礼の意味で献上されたのだろう。旗本では奉行経験者の名が多く見られた。旗本は幕府が財産形成のため投資を勧めたと思われる。

吉田勘兵衛が開墾した吉田新田では設計と工事監修を新左衛門が担当。資金の一部も名目上、提供した形になっている。実際には勘兵衛が資金を立て替え、工事が成功したら土地の一部を得られるが、それまではわずかな報酬しか得られないという契約で、現在のストックオプションに似たシステムだったようだ。

内川新田については、完成は1667年というのが地元では定説となっていた。現在は移築された夫婦橋のもとに立つ石碑に刻まれた年に基づいてのことだ。だが、私はその8年前には内川新田はいったん完成し、その翌年には最初の検地を受けたと考えている。

年代が明示されているわけではないが、江戸末期に編まれた「新編相模国風土記稿」や、明治時代初めの公文書に残る記述を読むと、万治年間（1658～1661年）には内川新田はいったん完成したと考えるのが妥当だ。1667年の石碑は安全祈念のために建てられたのだろう。

新左衛門が生前に残した文書はほとんど残っておらず、唯一残るのが、いわゆる

「遺訓」（神奈川県立公文書館所蔵）だ。2008年に出した本で遺訓全文を原文のまま活字化。この中で新田開発に情熱を注いだ者らしく「田畑が無ければ何事も成らない」と述べている。

[小中学校に出前授業]

ベンチャー精神にあふれた新左衛門の功績を後世に伝えるため、講演なども引き受けている。地元・横須賀を中心に小中学生向けの出前授業もしており、これまでに600人を超す児童・生徒に話をした。新左衛門の墓がある正業寺（横須賀市）では毎年、12月15日の命日近くの週末に「砂村新左衛門祭」が催される。三百五十回忌に当たる今年は新左衛門祭が盛大に執り行われることを願っている。（みぞて・まさのり＝元会社役員）

- 10) 注2、拙稿を参照。引詞また引句は、語を取り立てる用法である。文節が語であり、その語を詞と辞とすること、そしてまた、連文節であるときに句とすることは、文法の品詞分類、文法単位の捉え方によるところである。
- 11) 稿者にブログがある。goo ブログのサイトによる、「現代日本語百科」の現代日本語文章論、同じく、新聞記事を綴って「思い遥かに」の掲載しているところに、新聞社各社にそれぞれに恩恵を得ている。ここに記して、謝意を申し上げる。御批正をお願いするところ、ご参照いただければ幸いである。

参考文献

- 市川 孝（1978）『国語教育のための文章論概説』（教育出版）
 樺島忠夫（1967）『文章工学 表現の科学』（三省堂新書）
 時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』（岩波書店）
 永野 賢（1958）『学校文法・文章論』（朝倉書店）

『日本経済新聞』 2016年1月11日朝刊 文化欄記事 「開拓魂 江戸の発展支える」

<https://kotobank.jp/word/記述文法-50461> Cited:20160111

コトバンク> ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典> 記述文法とは)

<http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000204261> Cited:20160111

日本大百科全書(ニッポニカ) 「文」の項目

<http://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000204261> Cited:20160111

日本国語大辞典

<http://blog.goo.ne.jp/gooksky> 現代日本語百科

http://blog.goo.ne.jp/ksk_ym 思い遥かに

goo ブログ <http://blog.goo.ne.jp/>を参照